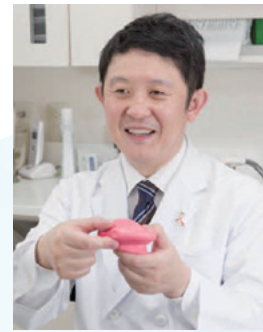




見えているのに早期発見が少ない口腔がん 口の機能と命を守る検診を！

▼2週間たっても治らない口内炎や傷は危険信号

「口内炎がなかなか治らなくて病院に行ったら、実は舌がんだった」
有名タレントのがん公表がきっかけとなり、口腔外科への問合せや受診が増えています。口の中にできるがんの特徴と、見逃さないためにはどうしたらよいかを、野村武史歯科医師に伺いました。



東京歯科大学市川総合病院
歯科・口腔外科
野村 武史 歯科医師

「口腔」とは口の中の前方部分を指し、口腔がんは、歯肉（歯ぐき）、舌（べろ）、舌の裏側、上あご・下あごの内側や、頬の内側など、口の中にできるがんの総称です。

がんは、歯を除いた口の中のどこにでもできますが、そのうち日本人に最も多いのは舌がん（写真1）です。すべての口腔がんの半数以上を占めています。

口腔がんの2大リスクは喫煙と飲酒です。性別では3:2の割合で男性に多く、50歳を過ぎてから増えてきます。

大腸がんや肺がん、乳がん等に比べると患者数が少ないため、以前は関心が低かったのですが、近年、有名女性タレントが舌がんを公表してから、歯科口腔外科の受診数が顕著に増えました。そのタレントの方も、最初は口内炎だと思っていたそうです。

口内炎というのは、基本的には特に治療をしなくても自然に治ります。それが2週間たっても治らなければ要注意です。まずはかかりつけ医で診断を受けたのち、しかるべき専門的な医療機関を受診すべきです。日本は超高齢社会を迎え、かかりつけ医・歯科医・薬剤師を持つことがとても大切になっていきます。かかりつけ歯科医により、日常の口の管理の中で、粘膜の異常をチェックしてもらうことが、口腔がんの早期発見につながると考えています。

口内炎と初期のがんを目で見ただけでは見分けるのは大変難しいため、最終的には専門医療機関で特殊な検査を受ける必要があります。

▼食事、会話、容姿へのダメージ軽減のため早期の治療・再建で機能を回復

口内炎ができて痛い、虫歯が欠けて尖った部分や治療した歯が当たって気になる

歯列が内側に倒れていていつも圧迫されている、唇や頬の内側をたびたび噛んでしまう。

そういったことの一つは誰でも経験があると思いますが、それらの慢性的な刺激が長年積み重なることで、がんを発生する下地ができ、前がんの状態へと変化します。これに飲酒や喫煙といった発がんリスクが加わると、さらに口腔がんの発症リスクが高くなります。したがって口腔がんは前がんの段階で発見することが大切です。代表的な前がん病変に白斑症があります（写真2）。口腔がんの治療は他のがんと同様に、手術、放射線、化学療法の3つが柱となりますが、主体となるのは、がんができた部分を切除する手術です。

口は、食べることや話すことなど、生活の基本となる重要な機能を担っているため、その機能をできるだけ損なわない治療が望まれます。

代表的な口腔がん



舌がん (写真 1)
舌のわきにできることが多い。口内炎と間違えやすい。



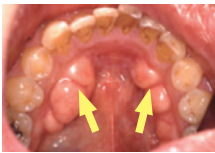
歯肉がん
初期は、歯周病と間違えやすい。

口腔がんではないが、がんになる可能性がある

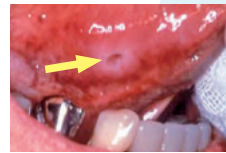


白板症 (写真 2)、こうばんしょう 紅板症、こうくわへんぺいはいせんとん 口腔扁平苔癬など

口腔がんと間違えやすい病気



こつりゅうき
骨隆起



口内炎

口腔がん早期発見チェックシート

お口の中をチェックする目安にしてください。

チェック

- 口内炎が2週間以上治らない
- 抜歯した傷が治らない
- 噛んだ傷が治らない
- 入れ歯が当たってできた傷が治らない
- 最近、歯が浮くような感じがする
- 白っぽいできものがある
- 赤くただれている
- かたいシコリをふれる
- 舌が動かなくなった
- 口が開きにくくなった
- 下唇や舌がしびれる

これらのなかで、一つでも当てはまる項目があったら、まずは口の中をチェックしてもらいましょう！

喫煙習慣や飲酒習慣のある方は要注意です。

近年では、進行がんであっても積極的に手術をおこなない、切除後に形態(かたち)の回復をおこなっています。たとえば舌がんなら、腕や太ももから取った組織を使って舌を再建できるため、舌を半分まで切除しても、食べたり話したりすることが可能です。

しかし、がんが進行し切除範囲が大きくなると、どうしても後遺症が残ります。味覚を失ってしまったり、会話に支障が出たり、飲み込みが困難となって十分な食事がとれなくなり、胃ろう(皮膚から胃に穴をあけチューブを通して栄養剤を注入する方法)が必要となる場合もあります。

さらには、手術で顔が變形してしまつたために人と会うことを避けて、家にひきこもってしまう方もいて、機能障害だけにおさまらない非常に大きな精神的なダメージを受けることもあります。

命を守るためにはもちろん、健やかな人生を送るためにも、口腔がんの早期発見は極めて重要なのです。

▼目に見えるのに見逃されがち。ぜひ積極的に口腔がん検診を！

内臓にできるがんとは異なり、口腔がんは自分の目で見て気づくことができるため、本来なら早期発見しやすいはずのガンです。

しかし、一般的には「口の中にもがんはできる」という認識が低いことや、自覚症状に乏しく口内炎だと見過ごされがちなこと、かなり進行してから受診される方が多いのが現状です。

日本は、先進国の中で口腔がんの死亡率が増加している数少ない国です。日本は世界一高齢化が進んだ国である

ため、高齢者に多い口腔がんが増えていることも理由としてあげられますが、米国等ではすでにADA(アメリカ歯科医師会)が口腔がん検診を推進するための行動指針が示されているのに対し、日本では、「口腔がんも定期検診が必要」と意識されていないことが、死亡率増加に歯止めがかからない原因の一つだと考えています。

早く治療すれば命だけでなく、その後の生活も守れるため、口腔がんの早期発見はとても大切です。一つの方法として、かかりつけの歯科医をつくっておいて、少なくとも半年に1回は歯や歯周のメンテナンスと一緒に、口の中全体をチェックしてもらってください(かかりつけの耳鼻咽喉科がある方は、そちらで診てもらおうと良いでしょう)。いずれにせよ、医療はもっと身近であるべきだと思います。いつでも相談できる先生がいると安心です。